
絶世の美女がよういよになりました。

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶世の美女がようゝよになりました。

【Nコード】

N7599P

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

愛すべき美姫が三歳になっちゃった!?

それでも持ち前の才能(?)で周囲の人々を魅了します。
月読の塔の姫君のお遊び企画です。

10/4月読の小姫から改題しました。

01 イルーシャ、おチビになる

「こんにちは、メイア」

イルーシャが茶髪で茶色の瞳の眼鏡をかけた二十代前半の女性に声をかける。

一介の魔術師にも気さくに声をかけるイルーシャ。

当の本人は意識していないらしいが、たびたび師団に訪れては、騎士たちの士気を高めていた。

魔術師団では、同じ女性ということもあって、年の近いメイアにイルーシャは親近感を抱いているようだった。

「なにか煙みたいのが出てるけど……なにを作ってるの？」

そばかすの浮いた鼻からずり落ちた眼鏡を押し上げながら、メイアは煙の立ち上がるガラス瓶に手を伸ばした。

「若返りの薬です、イルーシャ様」

「こ、ここには、そんなものがあるの？」

心底驚いたようにイルーシャが瞳を見開く。

「まだこれは実験途中なんです。……でも、これが完成すれば、全世界の女性の悲願が達成されるのですわ！」

「そ、そう……」

最後には拳を握って力説するメイアに、イルーシャが引いたように一歩下がった。

「でも、イルーシャ様にはこんな薬、あと数年は必要なさそうですわね。お肌もつるつるですし。化粧品なども最高のものを使われているんでしょう？ まったくうらやましい限りですわ」

「そう？ でもわたしはメイアがうらやましいな。王族だいろいろな拘束も多いし、面倒だよ」

「……イルーシャ様……」

全くなんの不自由もないと思われているイルーシャは、今の生活が窮屈らしい。

それなのに嫌みとも取られかねないことを言ってしまった自分をメイアは恥じた。

「ね、その薬、ちょっと見せてもらってもいい？」

少し気まづくなってしまうた空気を払拭するかのようにイルーシヤが明るい声を上げる。

「あ、はい……」

その時、二人の手がぶつかってガラス瓶が落下した。

「あ……っ！」

イルーシヤがとつさに紫色の液体の入った瓶を受け止めようとしたが。

どういう弾みか、ものの見事にイルーシヤは怪しげな液体を頭から被ってしまった。

中身を失った瓶は、床にぶつかって粉々に砕け散る。

その音で、はつと我に返ったメイアはイルーシヤに駆け寄る

「イ、イルーシヤ様大丈夫ですか？ お怪我は！？」

「だ、大丈夫。怪我はないよ」

その言葉でメイアはほつと息をついた。

「すみません、今、なにか拭くものをお持ちします」

「本当にごめんね。研究の邪魔しちゃって……。研究の成果もあんなにしちゃって……。ごめんなさい」

泣きそうな顔でイルーシヤが言う。

女の自分でもぐらくるのだから、男性がこんな顔をされたら堪らないだろうな、とメイアはこんな時に妙な感心をしてしまう。

「……これは、ただの事故です。イルーシヤ様はお気になさらないでください。……それより、なにか気分が悪いとかないですか？」

「気分……は悪くないけど、なんか視界が段々狭くなってるような気がする……」

なにか悪い副作用でもあったのだろうか、とメイアが心配になつてイルーシヤを見ると、視界が狭くなっているという理由がはっきりわかった。

「イ、イルーシャ様、背が縮んでます……」

「ええっ!？」

イルーシャが驚いて飛び上がるその間にも、背は縮み続けている。

——こうしてはいられない!

メイアは手早く綿織物を水に濡らして、イルーシャに駆け寄った。紫色の液体を拭いても拭っても、イルーシャの背が縮むのは止まらない。

「イルーシャ様、イルーシャ様……!」

どうしよう、とんでもないことになってしまった!

メイアは泣きそうになりながら、濡らした綿織物でこしこしとイルーシャを擦る。

ようやくイルーシャの背が縮むのが止まったと思った時には、彼女の年齢は三歳ほどになっていた。

「イルーシャ様……」

あの試薬は失敗作だったとメイアは気づくと同時に、王や自分の所属する師団長が愛してやまないとされる女性が幼児になってしまったことに恐れおののいた。

「おねえちゃん、かないで」

震えながら涙をこぼすメイアに、そう言って一生懸命腕を伸ばすイルーシャは健気で、メイアはその小さな体を思わず抱きしめていた。

02 イルーシャ、王子様に会う

しばらくイルーシャを抱きしめて泣いていたメイアは、落ち着くと緊急の連絡方法で師団長を呼びだした。

「メイア、入るよ?」

女性の部屋と言うことで、一言断りがあってからキースが部屋に姿を現す。

「……おうじさまだ」

ぽかんとしてイルーシャがキースを見て言う。

長い金髪や、美麗で優しい面立ちといい、確かにキースは王子に見えなくもない。

「……残念ながら、僕は王子じゃないよ。……つまり、これはどういうことなのかな?」

「イルーシャ様が実験中の試薬を被られてしまわれて……、こんなってしまわれました」

メイアが簡潔に要点だけまとめて言うと、キースは分かったとだけ返した。

「とりあえず、イルーシャに聞きたいことがあるから、メイアは出てもらっていいかな?」

「……はい」

肩を落としながら、メイアが部屋を出ていこうとすると、イルーシャが「おねえちゃん!」と呼びかけた。

「おねえちゃん、なかないでね?」

「……ありがとう、大丈夫よ」

メイアは幼いイルーシャの気遣いに泣きそうになりながらも、なんとかにこりと笑った。

メイアが部屋から出ていくと、キースはイルーシャと視線を合わせるために床に膝をついた。

「さて、ちょっと聞いてもいいかな?」

「なあに？」

小首を傾げてイルーシャが聞く。その様子はとても愛らしい。

「君の名前と歳は？」

「はらだゆき、さんさい」

イルーシャが三本指を立てて主張する。

キースはやっぱりか、と呟きながら、魔法で鏡面を作り出した。

「ひゃあ」

イルーシャが鏡に映った自分の姿を見て、驚いた声を上げる。

「いいかい、ユーキ。君はこれからイルーシャというお姫様だ。イルーシャ。分かるかい？」

「ゆき、いるーしゃ？ おひめさま？」

イルーシャは、きらきらした目で鏡とキースを交互に見た。

「そう、イルーシャ姫」

「ゆき、いるーしゃひめー！」

イルーシャがはしゃいで両手を上げる。

ユキが素直な子で本当に良かったとキースは心の中で苦笑した。

「だけど、君の本当の名前を他の誰にも言ってはいけないよ」

「なんで？」

「言ったら、悪い魔法使いに連れ去られてしまうからさ。だから絶対に本当の名前は言っちゃ駄目だよ」

イルーシャはキースの言葉に青くなつて、ぶるぶると震えた。

小さいイルーシャを脅すのはどうかと思つたが、これは機密事項だ。絶対に漏らしてはならない。

「ゆき、いわない。ゆき、いるーしゃ！」

「そうそう、イルーシャ。いい子だね」

キースに頭を撫でられて、イルーシャはえへへとはにかんだ。

「イルーシャ、僕はキースだよ。キース」

「きいす？ おうじさま、きいす？」

「そう、キース。王子じゃないけど」

「きいす、おうじさま」

もう、イルーシャの中では、キースは王子ということで決定なようだ。キースは仕方ないなと苦笑した。

「じゃあ、イルーシャ、お城の王様に会いに行こうか」

「おうさま？」

「そう、じゃあ行くよ」

キースはそう宣言すると、小さなイルーシャを大きくなったドレスごと抱え上げて城の入り口へと移動した。

「ひゃああー」

イルーシャは口を開けて白く美しい城を見ている。

「ほら、ここがお城だよ」

「おしろ」

キョロキョロとイルーシャが辺りを見回す。なにかを探しているようだ。

「ねーねー」

「ん？ イルーシャ、どうしたのかな？」

「——につきーまうすはどこにいるの？」

期待に目を輝かせて見られても、『につきーまうす』というものが何か知る由もないキースは首を傾げるしかないのであった。

03 イルーシャ、お姉ちゃん達に会う

「につきー……」

どうやらここには『につきーまうす』なるものはいないと察したらしいイルーシャは、しょんぼりしながらキースの服を掴んでいた。キースは『につきーまうす』なるものがどういふものか分かれれば幻影魔法で出すのに、と齒ぎしりしたい思いでいっぱいだったが、分らないものは仕方がない。彼は仕方なく諦めると、もう一度魔法でイルーシャの部屋へと移動した。

「まあ、どうされましたキース様。そのお子様はいつたい……」

リイナが応対に出て、イルーシャを見つめた。

「おねえちゃん、だれ？」

「わたくしはリイナです。お姉ちゃんという歳でもありませんが、そう言われるのは嬉しいものですね」

小さいイルーシャに視線を合わせて、リイナが屈む。

「ママがいった。おんなのひとは、みんなおねえちゃんだって」

「まあ、素敵なお母様ですね」

リイナがにつこり笑って言うと、母親を褒められて嬉しかったのか、イルーシャがぱあつと顔を輝かせた。

「えへへ、ありがとう」

キースにはどのあたりが素敵なのかは謎だったが、イルーシャが嬉しそうだから良しとすることにした。

キースがリイナにかいつまんで事情を説明すると、リイナは納得したように頷いた。

「まあ、それではやはりこのお子様はイルーシャ様ですか？ とても似ていらつしゃるので驚いてましたの」

そう言う割に、リイナは特に動じた様子も見せない。こういう時の彼女の肝の座り方はすごいなとキースは素直に感心した。

「うん、そう。カデイスにも説明しなきゃならないから、子供用の

支度をしてくれると助かるんだけど」

「かしこまりました。イルーシャ様の魅力が引き立つように、可愛く仕上げてみせますわ」

心なしうきうきとした様子でリイナが言う。

「頼むよ、僕は所用を済ましてからまた来るから」

「かしこまりましたわ。さあ、イルーシャ様、まずはお風呂に入りますよね」

「うんつ、えーと、りいなおねえちゃん」

「まあ、お利口ですわね。イルーシャ様」

リイナに抱かれてイルーシャが浴場へと向かうのを見届けて、キースは魔術師団のメイアの部屋の前へと移動した。

「これは事故だから、とりあえず君への処分は不問とするよ。イルーシャもきつとそうしてほしいと言っただろっしね」

所在なげに部屋の前に立っていたメイアにキースはそう告げる。

「けれど、王がなんとおっしゃられるか……」

「カデイスくらい、僕がどうにかできるよ。大丈夫、君は気にしないで」

不安そうに眼鏡の奥の瞳を揺らすメイアの肩をキースは軽く叩いて励ました。

「ありがとうございます、師団長」

キースの寛大な処置にメイアは感謝した。

「ところで、あの試薬は今まで作用期間が短かったんだよね」

「そうですね、長くて一月ほどでした」

「……とすると、一月はあの姿のままかもしれないんだね……」
なんととっても、愛する女性が幼児になってしまったのだ。

溜息をつくキースに、メイアは申し訳ない気持ちでいっぱいだっ
た。

「師団長、本当に申し訳ありません」

「ああ、いいよ。さっきも言っただけど、これは事故だから。……そ

れよりも、この試薬の効果が薄れる薬を作ってくれるかな。悪いけど、できるだけ早く」

「分かりました。急いで作ります、師団長」

メィアは頷きながら、不眠不休で作ろうと決意した。

「悪いね、頼むよ。それじゃ、ぼくはカデイスのところに報告に行ってくるから」

「分かりました。よろしくお願いします」

メィアが頭を下げる。それに頷くと、キースはイルーシャの部屋の前へ移動した。

「いやーん、イルーシャちゃん、似合いますわーっ！」

キースがイルーシャの部屋に入った時、ユーニスが頬を覆って甲高い叫びを上げていた。

「イルーシャちゃん、ほんつとーに、天使のようですわーっ！」

シェリーも頬を紅潮させて感極まったように胸の前で指を組んだ。いつの間にか二人の間では『イルーシャ様』から『イルーシャちゃん』に呼び方が変わっていた。

「えへへ、ゆーにすおねえちゃん、しえりーおねえちゃん、ありがとう」

鏡の前でイルーシャが頬を赤く染めながらもじもじする。その様子は殺人的な可愛さだ。

「まあまあ、この可愛さはさすがイルーシャ様ですわね」

ただ一人、呼び方が変わらない者もいた。「さすがイルーシャ様ですわ」が口癖のリィナだ。

「やあ、ずいぶん可愛くしてもらったね、イルーシャ」

青いリボンとレースのたくさん付いた子供用の白いドレスを着せられて、横の髪を青いリボンで結んだ小さいイルーシャは本当に愛らしい。

イルーシャはキースにはに cand 笑いを向けると、彼の前にとてとてと歩いて来た。

「かわいい？ きいす、いるーしゃ、かわいい？」

イルーシャがにつこーっと笑って、キースの前で可愛らしくドレスを広げてみせると、ユース達がキヤーキヤー騒いだ。

「かわいいーっ」

「食べちゃいたーい」

「あ、ああ、とっても可愛いよ。イルーシャ」

侍女達に若干押され気味になりながらも、キースがにつこり笑って答えると、小さなイルーシャは、嬉しそうに顔を輝かせた。

04 イルーシャ、王様に会う

キースはイルーシャを腕に抱いてカデイスの執務室を訪れた。

「なんだ、キース。隠し子か」

イルーシャに目をやると、カデイスはふざけたことを言った。少し嬉しそうなのは、キースの気のせいだろうか。

「そんなわけないだろう。この子をよく見てほしいね」

カデイスはまじまじとキースの腕の中のイルーシャを観察すると、今度は真剣な表情で言った。

「まさか……、イルーシャの隠し子か？」

「……なんで、そうなるかな」

キースは思わず溜息をついた。

「いるーしゃ、いるーしゃなのー」

自分を指さして、イルーシャが主張する。

「……なんだと？」

厳しい口調のカデイスにイルーシャはびくりと体を震わすと、泣きそうな顔になる。

「カデイス、イルーシャを脅かさないでくれるかな？」

「あ、ああ、悪い。……しかし、これがイルーシャだと？ なぜこんな姿なんだ」

「開発中の若返りの魔法薬を被ってこうなったんだよ」

「なぜ、そんなことになるんだ。……責任者は誰だ」

「僕」

煙に巻くようなキースの言葉に、カデイスは齒噛みした。

「そうではなくて、実際の担当の者がいるだろう。誰だ」

「それは言えないね」

どこまでも担当者をかばおうとするキースに、カデイスが気色ばむ。

「なんだと。身内をかばうつもりだろうが、俺はそこまで甘くない

ぞ」

「カデイス、これは事故だ。……それにイルーシャが戻った時に、君が担当者を処罰したと知ったらどんなに悲しむか分からないよ。もしかしたら、君を恨むかもしれないね」

畳み込みようなキースの意見に、カデイスがうつと詰まった。

「しかしだな……」

「カデイス」

言葉を連ねようとするカデイスをキースが遮った。

「まだなにか言うようなら、イルーシャにエーメ並木にかかった金額をばらすよ」

「ばらすよー」

イルーシャはなにかおもしろいことが起こっているのかと誤解して、キースの語尾を真似する。

これは効果抜群だったようで、カデイスが絶句した。

「……っ、分かった。この件は不問にするっ」

エーメの並木道には、かつてイルーシャが心配したように、莫大な金額がかかっていた。暴露されてはかなわないと、早々にカデイスは降参した。

「きいす、えーめってなに？」

「ん？ サクラのことだよ」

「さくら！ いるーしゃ、さくらすきー」

きらきらとイルーシャが瞳を輝かせる。

「うんうん、君は好きだよ。後でサクラ見ようね」

「うん！」

嬉しそうに笑うイルーシャの背をキースがポンポンと叩いた。

「……イルーシャ、キースに懷いてないでこっちに来い」

「……おじちゃん、だれ？」

小さいイルーシャの爆弾発言に、カデイスが凍りついた。

三歳からすれば、二十代前半は確かにそう言われても仕方ないかもしれないな、とキースは苦笑した。

「カデイスだよ、イルーシャ。この国の王様」

「かでいす？ おうさま？」

そう、とキースが頷くと、イルーシャはぶんぶんと首を横に振った。

「ちがうもんっ。おうさまはもっとおじいちゃんだもんっ」

「おい……」

先程からさんざんな言いぐさをされて、カデイスが口を挟もうとしたとき、アリストの来訪が告げられた。

「なにやら、可愛らしい子がいると聞きましたな」

——引退間近の癖に、どこから聞きつけて来るんだ、この古狸。

どちらの心理ともしれない毒吐きが行われている中で、イルーシヤが目を輝かせた。

「おうさまっ」

「ほお」

アリストに向かって手を伸ばすイルーシヤを彼は受け止めた。

「これは実に可愛らしいのお、イルーシャ様」

なぜか、アリストは小さいイルーシヤがイルーシャだと知っていた。長年宰相に就いているこの老人の情報網は侮れない。

「おうさま、いるーしゃ、しってるの？」

「よく知っておりますよ。わしはアリスト。……まあ、王様でも構わんですが」

「いや、構うだろう」

そのカデイスの突っ込みは軽く無視された。

小さなイルーシヤはアリストに高い高いをされてきゃっきゃと喜んでいた。

05 イルーシャ、お茶会をする

アリストの手からイルーシャを奪ったカデイスは、その小さな体を抱きしめていた。

「いたい、いたいー」

「あ、ああ、すまない」

つい、普段のイルーシャと同じように抱きしめてしまつて、カデイスはうろたえる。

「カデイス、小さい子なんだから手加減しないと」

「……普段でも手加減してるぞ」

カデイスのこの台詞には、キースも顔をひきつらせた。

「ふうん、そうなんだ。そんなにイルーシャを抱きしめてるわけだ。

……イルーシャ、乱暴なカデイスの傍にいろくなことないからおいで」

キースがイルーシャに両手を差し出したが、カデイスは奪われてなるものかとさっさとテーブルセットに腰を下ろした。

「なにか、飲み物を持ってこさせよう。……なにがいい？」

「いるーしゃ、じゅーすがいい」

「そうか」

カデイスは侍女に飲み物を持ってくるよう命じると、イルーシャを膝の上に座らせた。

「カデイス、イルーシャを独占するつもりかい？」

「ああ、そうだ。独占してなにが悪い」

「それはずるいですぞ、陛下」

「へーか？」

イルーシャが小首を傾げる。

「俺のことだ。王のことを通常そう呼ぶ」

「う？ カデイス、おじちゃんなのにおうさま？」

「若くても王様はいるんだ。……それと、おじちゃんではなく、せ

めておにいちやんにしろ」

カデイスもこのイルーシャにだんだん順応してきた。

「うん。かでいす、おうさま？」

「そうだ、王様だ」

「ふええ、かでいす、おうさま。きいす、おうじさま？」

「……なぜ、キースが王子になつてゐるんだ」

キースと年が近いのにおじちゃん扱いされたカデイスは不機嫌になる。キースはただ苦笑するしかなかった。

「否定はしたんだけどね」

その時、侍女がお茶と果汁を持ってきた。イルーシャ用に焼き菓子も用意してある。

「おかしー」

イルーシャが焼き菓子に手を伸ばす。普段のイルーシャも好きな菓子だ。

カデイスがそれを取ってやると、イルーシャはにこにこした。

「おいし〜っ」

イルーシャが幸せそうな顔をして菓子を食べる。

「こういうところは変わらないんだね」

キースが微笑ましそうにイルーシャを見て笑った。

「確かにイルーシャは実に旨そうに食べるな」

「見ていて気分がいいですなあ」

焼き菓子を食べ終えたイルーシャは、今度は果汁に手を伸ばした。

「おれんじじゅーす、おいしーよ」

「そうか、うまいか」

「うんっ」

にこにこする小さいイルーシャを緩んだ顔で見るカデイスはかなり異様だった。

「陛下が子供好きとは意外だったのう」

「いや、苦手だが、イルーシャとなれば話は別だ」

イルーシャの頭を撫でながらカデイスが答える。

「……どうせ、邪なこと考えてるんだろ。これが大きいイルーシヤだったらか」

「なぜ分かる」

「カデイスの考えそうなことは大体分かるよ。頼むから、犯罪だけはやめてほしいね」

「……キース、俺をなんだと思ってるんだ」

「けだもの」

キースがきつぱりと断言する。それを聞いていたイルーシヤが愛らしく首を傾げた。

「けだものって、なあに？」

「ん？ カデイスみたいな人のことだよ」

こともなげにキースが言ったことに、カデイスは慌てる。

「おいっ。イルーシヤ、キースのような人間のことだぞ。間違えるな」

「う？ かでいす、きいす、けだもの？」

「俺は違うぞ」

「僕も違うから」

小さいイルーシヤに妙な固定観念を植え付けてはいけないと、二人は必死になって否定する。

「？ けだもの、ちがうの？」

「そうだ、違うぞ」

「そうそう」

必死な二人をアリストが一人呆れた目で見る。

「……二人とも似たようなものじゃろって」

その呟きは、幸か不幸か当の二人には届かなかった。

06 イルーシャ、お花見をする

「さくら」

お茶会をすませたイルーシャは、新名所になったエーメの並木道に来ていた。

イルーシャは舞い落ちる花びらを追いかけて、とてとて歩く。

「なんでカデイスまで来るかな。それもアリスト老に執務押しつけてまで」

キースは不満を隠そうともせずに、カデイスに言った。

「書類の整理を頼んだだけだろう。決裁を頼んだわけでもないし、たまには俺も息抜きしてもいいだろう」

「カデイスは息抜きしすぎだよ」

カデイスの息抜きというのは、たいていイルーシャ絡みなので、自然とキースの口調も辛辣になる。

「きいす、かでいす、けんかよくないっ」

むう、と頬をふくらませてイルーシャが怒る。

「ああ、ごめん、イルーシャ」

「すまない」

小さいイルーシャに怒られて二人は素直に反省した。

せつかく花見に来ているのだから、その風情を楽しまなければ損と言つものだ。……傍にはイルーシャもいるのだから。

「おや、珍しい組み合わせですね」

ふいに声をかけられて、三人はその方向を向く。

そこに立っていたのは、ブラッドレイとヒューイだった。親友同士
の二人は、普段もつるんでいることが多い。

「今、執務室に伺うところだったのですよ、陛下」

ブラッドレイに報告書の束を掲げられたカデイスは一変して辟易した顔になる。

「持ってこなくてもいい」

「そういうわけには参りませんよ。それはそうと、その御子は……」
ヒューイが苦笑してから、イルーシャを見る。

「……ああ、イルーシャだ」

カデイスの言葉にブラッドレイとヒューイの目が点になる。

「は？ ……いや、これは失礼を」

よく考えてみれば、子連れでカデイスとキースが花見をしていること自体が異様なのだ。……だが、これがイルーシャとなれば全ては合点がいった。

「……なぜ、このようなことに」

「誤って若返りの薬を被ってしまったね。三歳まで若返ってしまったんだよ」

ヒューイが呆然として尋ねると、キースが苦笑して答えた。

「もしかしたら、あと一月はこの姿のままかもしれないんだよね。」

……効果を薄める薬は急いで作らせてはいるんだけど」

「なんだと、そんなことは聞いてないぞ」

「かでいすっ」

声を荒げたカデイスに、イルーシャがぴと、とくつついた。

「あ、ああ。すまないな、イルーシャ」

イルーシャを抱き上げ、ふくれるイルーシャをあやすように背中を撫でた。

「……しかし、三歳になってもイルーシャ様はイルーシャ様ですね……」

「陛下をすぐに諫められるところは、さすがというしかありませんね」

ヒューイとブラッドレイの感心したような言葉にキースは苦笑した。

「そうだね、カデイスの手綱を一番取れるのはイルーシャなのかもね。……嫌だけどね」

「かでいす、おりるっ」

「そうか」

カデイスが残念そうにイルーシャをおろすと、てってつとブラッドレイ達に駆け寄った。

「危ないよ」

慌ててキースがイルーシャの傍に行く。それでも、イルーシャは見慣れない二人が物珍しいのか、その手をすり抜けてブラッドレイとヒューイを見上げた。

「おじ、おにいちゃん、だれ？」

イルーシャはブラッドレイにおじちゃん、と言いかけたが、カデイスでどうやら学習したらしく、きちんと言い直した。

一方のブラッドレイはイルーシャの言いかけた言葉をすっかり聞いてはいたが、この歳の子供には珍しくもないことだと認識していたので笑っていた。むしろ、言い直したイルーシャに賢いなど感心もしていた。

「ブラッドレイです、イルーシャ様。ブラッドとお呼びください」

「ぶらつど？」

「はい、そうです」

ブラッドレイが笑顔で答える中、イルーシャは「ぶらつど、ぶらつど」と復唱していた。

「わたしはヒューイです。ヒュー、とお呼びください」

ヒューイがイルーシャの前に出て名乗る。すると途端にイルーシャが目をきらきらと輝かせた。

「うんっ、ひゅーおねえちゃん、とってもきれいだね！」

頬を紅潮させてイルーシャが言う。

……その場の空気がピシリと凍ったのは言うまでもない。

07 イルーシャ、理解する

ヒューイは我に返ると、慌てて訂正した。

「いや、わたし、いえ、俺はおにいちゃんですから」

「うそっ」

大きな瞳を見開いて、イルーシャが驚く。

「本当です」

「んー、ひゅー、おにいちゃん？　かがんで、かがんで」

イルーシャがぴよんぴよんと跳ねながら、ヒューイに屈むように言った。

「？」

疑問に思いながらもヒューイが屈むと、イルーシャは鎧を身につけていない彼の胸をペタペタと触った。突然のことに周囲が沈黙する。

「ほんとだ、おむねがないー。おにいちゃんだー」

感心したようにイルーシャはヒューイの胸を触りまくる。

「いや、あの……っ」

ヒューイは頬を染めながら、おかしなほどうろたえた。

触りまくって満足したのか、イルーシャはヒューイから離れてキースに近寄る。

「じゃあ、みんな、おにいちゃん？」

「……そうだね」

ヒューイは赤い顔をして、その場に固まっていた。その肩をブラッドレイが叩く。

「しっかりしろ。あらぬところを確認されるよりましだろう？」

「……っ、イルーシャ様がそんなことするか！」

ヒューイが耳まで真っ赤にして勢いよく立ち上がる。

「ひゅー、なあにー？」

イルーシャが自分が呼ばれたのかと勘違いして、とてとてとヒュー

ーイに近づく。

「い、いえ、なんでもないですから……っ」

途端にヒューイはさっきまでの勢いをなくして真っ赤な顔で首を横に振る。その様子をキースが冷たい目をして見ていた。

「……ふうん、ヒューイはイルーシャの信者なんだ。これは、これから気をつけないとね。イルーシャも彼のこと結構気に入ってるみたいだし」

「……ばれましたか。本人も気をつけていたみたいですけど、こうなつては仕方ないですね」

「あれでは隠しようがないな。……ところで」

カデイスとキースがブラッドレイの肩を叩く。

「おまえは大丈夫なのか？」「君は大丈夫だろうね？」

「……さあ、どうでしょう」

「ひゅー、おひめさまみたいにきれいでも、おにいちゃんなんだね！」

一部で不穏な空気が流れる中、イルーシャは無邪気にヒューイの傷に塩を塗り込むようなことを言った。

「……はあ」

ヒューイはイルーシャに手を掴まれて赤くなつたままだ。

「んー、いるーしゃ、わかつたー。みんなおにいちゃん」

イルーシャはヒューイの手を離すと四人の前に立つ。

「ええと、かでいす、おうさまで、きいす、おうじさま」

王子様？ とブラッドレイとヒューイが首を傾げる。

「それでね、それでね」

イルーシャが楽しそうにその場でぴよんぴよん跳ねる。

「かでいすときいすは、けだものなのーっ！」

「……っ」

「イルーシャ！」

噴き出すブラッドレイとヒューイ。叫ぶカデイスとキース。

「いる……っしゃ、さまの口から……っ、けだもの……っ」

ブラッドレイが腹を抱えて爆笑する。

「おいっ」

ブラッドレイの脇腹をヒューイが肘でつつく。

「だって、おまえ……っ、くっ、おかしすぎる……っ」

確かにすごい皮肉ではある。……言った本人は全く意図してはいないが。

「？」

イルーシャが不思議そうに首を傾げる。

「どうしたのー？」

「イルーシャ、それは違うと言ったろう？」

「……ちがうの？」

カデイスとキースの鬼気迫る表情に、イルーシャは肩を震わせた。

「うん、違うから」

「とにかく、それは二度と人前で言うな。分かったな？」

二人に言い含められて、イルーシャは眉を下げて頷いた。

「うん、……ごめんね？」

イルーシャに泣きそうな顔で小首を傾げて見られると、カデイスとキースはなにも言えなくなってしまう。むしろ、そんな顔をさせた自分達が悪いような気になってきた。

「……つくづく天然は怖いな」

ブラッドレイが感心したように言う。ヒューイはそれを肯定していいのか逡巡してから、結局は頷いた。

08 イルーシャ、ホームシックになる

花見の後、疲れて眠ってしまったイルーシャは、自室の寝台へと運ばれた。

「……まま？」

見慣れない部屋で目を覚ましたイルーシャは掛かっていたシーツからもぞもぞと這いでも。

「まま、ぱぱ、どこー？」

少し高さのある寝台から腹ばいになって足から降りると、イルーシャは辺りを見回しながら泣き出した。

「ま、まあまあ、イルーシャ様！ どうされたんですか？」

隣室に控えていたリイナが突然の鳴き声に驚いて、寝室に入ってきた。

「あのね、あのね、ままとぱぱがいないの。ままとぱぱ、どこにいったの？」

イルーシャの大きな瞳から涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。

「まあ……」

泣きじゃくるイルーシャを抱きしめながら、リイナは内心困っていた。

イルーシャが異世界にいたという事情は分かっていたが、なんと答えてよいのか分からない。

リイナはハンカチでイルーシャの涙を拭くと、小さな体を抱き上げて、居室の長椅子に腰を下ろさせた。

「少々お待ちくださいね、イルーシャ様」

リイナは、キースを緊急に呼び出した。事情を知っていて、この事態にすぐ対処できるのは彼ぐらいだろう。

「どうしたの？ ああ、イルーシャが」

すぐにキースは部屋に移動してきて、イルーシャに目をやる。

「ままとぱぱがいないの」

イルーシャはえぐえぐと泣きながら、椅子から降りるとキースにすがって訴えた。

「ごめんね。君のママとパパはお仕事が忙しいんだって。しばらく君はここで預かることになったから」

全くの口からでまかせだったが、イルーシャはいったん泣きやんだ。

「ままとばば、おしごと?」

「そう、ごめんね?」

以前キースはイルーシャに両親が共働きで、ほとんど家にいなかったと聞いたことがあった。それがこんな時に役に立つとは思わなかったが。

「……おしごと……」

一瞬イルーシャは寂しそうな顔になると、次にはにこつと笑った。
「うん、いるーしゃ、わかった」

こんなに小さいのに物分かりがすぎる子だな、とキースはなんともいえない気分になる。

「ままとばば、おしごとがんばってるもん。いるーしゃ、がまんする」

「まあ……、イルーシャ様、こんなにお小さいのに、なんて健気なんでしょう」

リイナが感心したように呟いたその時、突然扉が開いた。

「おい、キース。俺を置いていくとは、どういうことだ」

カデイスははずかすかと部屋に入ってくると、びつくりしたように目を見開いているイルーシャに目をやった。

「なんだイルーシャ、泣いていたのか?」

涙のあとが残るイルーシャの顔を拭ってやると、カデイスはその体を抱き上げた。

「泣くな、イルーシャ」

「なかないよー」

カデイスがあやすように背中を撫でると、イルーシャは彼にしが

みついた。

「カデイス……、突然来て、おいしいところを持っていくなんてずるいな」

キースがむつとしていると、カデイスが偉そうに言った。

「おまえが俺を連れていけないのが悪い」

キースは冷めた目で、ああそう、とだけ言うと、イルーシャに向かってにつこりと笑った。

「……イルーシャ、今日の晩ご飯はハンバーグにしたけどいいかな？」

「はんばあぐ！ いるーしゃ、すきー」

途端にきらきらした目でイルーシャがキースを見た。

「そう、よかった。もうすぐできるから待っててね」

「うん！」

「ハンバーグとは、なんだ？」

にこにこするイルーシャを抱いたカデイスが不思議そうに尋ねた。
「イルーシャの世界にある、平たい楕円形の挽き肉料理。イルーシャが作ったのをカデイスも食べてるはずだけど」

「ああ、あれか。あれは確かにうまかったが、……イルーシャが作ったのか？」

「うん、そう。たまにイルーシャは厨房で料理作ってるよ。段取りから、包丁さばきや味付けも見事なんで料理長も驚いてた」

それは料理長もさぞ驚いただろう。まさか伝説の姫君が料理するとは思うまい。

「料理長もイルーシャから作り方習ってたよ。……それでもイルーシャからすると、材料がないものもあるから味がまいちだっただけだよ」

「まあ、そんなことはありませんのに。イルーシャ様の料理は素晴らしいですわ」

リイナがいかにも心外そうに言う。

「……自分で作ったのなら、そう言えればいいのになぜ言わないんだ」

そうすれば褒めたぞ、とカデイスは少しむっとして言った。どうやら自分だけ知らなかったのが悔しいらしい。

「知られるのが恥ずかしいからって言ってたよ。イルーシャからも口止めされた」

「どれだけ照れ屋なんだ、イルーシャは」

「う？ いるーしゃ、なに？」

先程から自分が話題になっているのが、小さいイルーシャには気になるらしい。

「……ああ、なんでもない。イルーシャ、あとでハンバーグ食べような」

「うん！」

カデイスに背中を軽く叩かれて、元気よくイルーシャが返事をする。

できればもう一度イルーシャが作ってくれたのを食べたかったとカデイスは一人思った。

09 イルーシャ、カプトムシになる

「かでいす、きいす、おはよーっ」

リイナに庭園に連れてきてもらったイルーシャは先を争うようにして現れた二人に挨拶した。

「おはよう、イルーシャ」

「ああ。イルーシャ、今日は元気そうだな」

昨日家が恋しくて泣いたイルーシャは、今日はににこと機嫌がよさそうだ。

「うんっ。おはなきれーだね！」

どうやら、エーメ並木に続いて庭園がイルーシャのお気に入りになったようだ。このあたりは、大人のイルーシャと好みは変わっていないようである。

「陛下、キース様、おはようございます。できましたら、イルーシヤ様のお相手をお願いしたく存じますが、よろしいでしょうか」

「ああ、いいぞ」

「もちろん、そのつもりで来たからね」

リイナの願いを二人は快く引き受けた。……もとより、そのつもりがなければここにはいないはずの二人なのだが。

「おまえ達もここで控えている」

「はっ」

三人はリイナと近衛騎士達を残してその場を離れた。

「きれいー」

爽やかな風に吹かれて、花々が揺れる。

その様子をイルーシャが目を輝かせて見ていた。

「ねーねー、おはな、もらっていいーい？」

「ああ、いいぞ」

「わあいつ」

カデイスの返事にイルーシャが両手を挙げて喜ぶ。

イルーシャは興味津々な様子で辺りを見回していたが、なにを思ったのか手近な樹によじよじと登り始めた。

「危ないよ」

キースが慌てて声をかける。

「だいじょぶー」

そう言うのと、イルーシャは樹にしがみついたまま静止した。

「？」

もしかして降りられなくなったのかと思って二人が内心ハラハラして見ていると、ふいにイルーシャが言った。

「みてみてー、いるーしゃ、かぶとむしー」

イルーシャの突飛な言動に、キースは思わず噴き出した。

「可愛い……っ、可愛すぎる」

腹を抱えて笑うキースに舌打ちすると、カデイスはイルーシャを樹から引きはがした。

「まったくお転婆がすぎるぞ。なにをやってるんだ、おまえは」

「やーん、かでいすのいじわるう」

舌つ足らずなその声に、カデイスは思わず固まった。その間にもカデイスに羽交い締めされた格好でイルーシャがじたばた暴れる。

「……カデイス、今変なことを考えただろ」

「い、いや、そんなことはないぞ」

「いいや、絶対考えた。今の言葉を大人のイルーシャに言わせたいとか考えただろ」

「はなして、はなしてえ」

「……」

カデイスは一瞬赤くなると、イルーシャを地面に降ろした。

「……カデイス、言っておくけど今のイルーシャは三歳なんだからね」

「あ、ああ、分かっている」

狼狽えたようにカデイスが頷くと、イルーシャは二人を置いて、

てつてつと駆けだした。

「あ、イルーシャ」

「危ないぞ」

二人が慌てて追いかけると、イルーシャは開けた場所の芝生に膝をつくところだった。

「ねーねー、みてて、みててー」

今度はなにをする気だと二人がイルーシャに注目する。

「ぜんてーん」

そう言つと、イルーシャは芝生に手をつき、前に回り始めた。

……前転、というより前転もどき。はつきり言つと、体が斜めになつて回り切れていない。

それでも、イルーシャは前転を試みる。

慌てたのは傍にいる二人で、一斉に叫びだした。

「イルーシャ！」

「見える！ やめろ！」

二人に大声で止められて、イルーシャはようやく止まった。

「ふあ？」

イルーシャが芝生に座り込んだまま二人の方を向く。

乱れたドレス、覗く白い脚。

乱れて顔にかかった一房の髪、紅潮した頬、半開きの唇。

「……っ」

幼児とは思えない色気に、二人が絶句する。弱冠三歳でこれとは末恐ろしい。

「かです、きいす、どしたの？」

イルーシャが小首を傾げて聞いてきたことで、ようやく二人は我に返る。

「イルーシャ、その格好で前転はやっちゃ駄目だよ」

「いや、その前に姫がそういうことをやるな」

二人に駄目だしされて、イルーシャは大きな瞳を見開く。

「……おひめさま、ぜんてんやらない？」

「やらないよ」

「ああ、やらないな」

「……そっかー」

イルーシャが眉を下げて、残念そうに呟く。

「ぜんてん、みえるからだめ？」

「……っ、ああ、だめだ」

カデイスは一瞬言葉に詰まると頷いた。

「なにがみえるの？」

「イルーシャ、それは聞いちや駄目だよ」

キースは有無を言わせない笑顔で言った。

いくら小さくても、イルーシャに下着が、などと言えるわけがない。

「？」

イルーシャは不思議そうに首を傾げていたが、やがて不承不承頷いた。

「わかったー。いるーしゃ、ぜんてんやらないよー」

「うふふふ」

少し離れた場所でその様子を観察している者がいた。侍女長のリイナだ。

彼女は諜報用の魔法眼鏡を外すと嬉しそうに笑った。ちなみに魔法眼鏡とは離れた場所の映像と音声を送る魔法器具だ。

「三歳でもお二人を悩殺されるなんて、さすがイルーシャ様ですわ」
有能とされる侍女長の実益をかねた趣味が覗きであるとは、周囲にはあまり知られていない。唯一、接点の多い近衛騎士達だけが自分達の団長の奥方の趣味を知っていると聞いた。

「……リイナ様、楽しそうですね……」

団長もすごい方を奥方にしてるなあと近衛騎士達はダリルの胆力に感心していた。

10 イルーシャ、大人になる

「師団長、できました！」

そう言つと、メイアが小さな白い包みを持ってよろよろとキースの執務室に入ってきた。どうやら、キースがメイアに頼んでいた薬ができたらしい。

「もうできたんだ。よくやったね、メイア」

「はい、ありがとうございます」

キースが褒めると、幾分やつれたメイアが嬉しそうに笑った。

「これで、イルーシャも早く元に戻ることができるよ。ありがとうメイア」

「いいえ、とんでもありません。……それで、この薬ですけれども、まず様子を見るために少量からお試してください。……なにぶん被験者が少ない薬ですので」

「うん、わかった。早速試してみるよ」

キースは頷くと、薬の包みを手にしてイルーシャの部屋の前まで移動した。

「あれっ、きいすだあ」

部屋でおやつを食べていたイルーシャは、キースの来訪にびっくりした。

「きいすもおやつ、たべる？」

「ごめんね、今日は一緒に食べられないんだ」

「そっか」

イルーシャが心なしがっかりしたように言う。

キースはイルーシャに付いていたユーニスと呼ぶと、薬の説明をした。

「——では、このお薬を飲み物に混ぜるのですね。分かりましたわ」
ユーニスがキースの話に頷いて、イルーシャ用の果汁を運んでき

た配膳台の上に薬の包みを置いた。

「うん、まずは少しだけね。頼むよ。僕はカデイスに効果が薄れる薬が出来たことを報告に行くから」

「かしこまりました」

ユーニスは部屋の出口でキースを見送ると、イルーシャへ振り返った。

「さあー、イルーシャちゃん、お薬を飲みましょうね……、あ、あら？」

確かに配膳台に置いたはずの薬の包みがなくなっていたので、ユーニスは慌てた。

「いるーしゃ、おくすり、じゅーすにまぜてのんだよー」

「の、飲んだの……？」

テーブルを見れば、広げた薬の包みが無造作に置かれていた。

「うんっ、おいしかったよ。にがくなかった」

にこにこしてイルーシャが答える。

先程のわずかな間に、話を聞いていたイルーシャが配膳台から薬を持ち出して、果汁に混ぜて全部飲んでしまったことを把握したユーニスは青ざめた。

「あれ、ゆーにすおねえちゃん、どしたの？」

「き、気分はなんともないんですの？」

「きぶん？ ……いるーしゃ、ちよっとねむいかも……」

イルーシャが眠そうに目を擦る。

「イ、イルーシャちゃん、おねむですね。とりあえず、寝室に行きましょうね……」

ユーニスは顔をひきつらせながら、イルーシャを抱き上げて、寝室まで連れていった。

イルーシャを寝かしつけると、ユーニスは緊急にキースを呼び出した。

「どうしたの？ ……イルーシャは？」

すぐキースが移動してくると、イルーシャがいないことに気づい

て、部屋の中を見渡した。

「い、今、眠られております。た、大変なんですの、キース様。イルーシャちゃ、……イルーシャ様が薬を全部飲んでしまわれて……」

「なんだって」

キースはイルーシャの眠る寝室に視線をやると唸るように言った。
「……全部飲むと、なにか問題でもあるのか？」

キースについて移動してきたカデイスが事態の重大さを感じ取り、真剣な顔をして聞く。

「被験者が少ない薬だから、どんな副作用があるか分からないんだよ。だから少量から試す予定だったんだ」

「なんだと、イルーシャは大丈夫なんだろうな？」

カデイスの言葉の調子が厳しくなつて、ユーニスが泣きそうな顔をした。

「カデイス」

キースが、カデイスを諫めるように名を呼ぶと、ユーニスに向き直った。

「……とりあえず様子を見たいから、寝室に入ってもいいかな？」

「は、はい」

ユーニスが頷いて、寝室の扉を開ける。しかし彼女は驚いたように瞳を見開くと、すぐに扉を閉じた。

「おい？」

「ユーニス、どうしたの？」

「も、申し訳ありません。今入ってはいけませんわ。……少々、そのままでお待ちくださいませ」

そう言つと、ユーニスは寝室の中に体を滑り込ませるように入つていった。

「イルーシャ様」

「ゆーにすおねえちゃん」

ユーニスが名を呼ぶと既に起きてきていたイルーシャはにっこりと笑った。

口調は先程と変わらないが、その姿は。

——可憐さを残す絶世の美貌、見事な肢体。

大人の姿のイルーシャは、破れたドレスをまとわりつかせながら、驚いたように瞳を見開く。

「あれー、ゆーにすおねえちゃん、ちいさくなってるー」

「うそおおお……」

信じられない事態に、ユーニスは口を両手で覆う。

「なにがうそなの？」

ユーニスの混乱をよそに、イルーシャは暢気に首を傾げていた。

11 イルーシャ、だっこされる

「いるーしゃ、おとなになっちゃったーっ」

ユーニスによって大人用のドレスに着替えさせられたイルーシャは、鏡の前ではしゃいでいる。

「そうですね、大人ですねー……」

イルーシャの無邪気な様子に、ユーニスがひきつった笑いをこぼした。

「お待たせいたしました」

ユーニスは寝室の扉を開けると、居室で待っていたカデイスとキースの前にイルーシャを連れていく。

「イルーシャ、元に戻ったのか！」

カデイスが立ち上がって、イルーシャを抱き締める。すると、イルーシャはその背に腕を回して抱き締め返した。

「イルーシャ……」

キースが驚いたようにその様子を見ていた。

「イルーシャ？」

信じられないというようにカデイスがイルーシャを見る。

「かでいす、だっこして？」

イルーシャがにこにこしてカデイスを見た。

「……イルーシャ、どうしたんだ」

カデイスはイルーシャの肩をつかんで引き剥がすと、その瞳を覗きこむ。イルーシャの瞳はどこまでも無邪気だった。

「かでいす、いたい」

「……ああ、すまない」

カデイスが慌てて手をどかすと、イルーシャはカデイスの脇をすり抜けた。すると、今度は両手を伸ばしてキースへと抱きつく。

「きいす、だっこして」

「うんうん、抱っこね。イルーシャ、今日も可愛いね」

キースがそう言っていると、イルーシャはぱあっと顔を輝かせた。

「えへへ、ありがとう」

嬉しそうに彼の肩に顔を擦りつけるイルーシャの体をキースが抱き締めた。

「おい、これはどういうことだ」

「うーん、体は大人に戻ったけど、中身までは戻らなかったってことだろうね」

キースは少し考える様子でそう言っていると、イルーシャを抱き上げた。

「わあい、だっこ」

イルーシャはキースの首に腕を回して抱きつきながらはしゃいだ。それを見てカデイスは顔をひきつらせる。

「イルーシャ、俺が抱っこしてやる。キースから離れる」

「や。かです、さっきだっこしてくれなかったもんっ」

イルーシャがカデイスにあかんべする。その様子をユーニスが修羅場が訪れそうだとハラハラして見ていた。

「離れる」

カデイスは無理矢理イルーシャをキースの腕から奪った。

「やーんっ」

イルーシャが可愛らしい抗議の声を上げる。

「ほら、抱っこくらい、いくらでもしてやるぞ。だからキースになつくな」

イルーシャの背を抱き締めながら、カデイスは久々のその感触に感動していた。

ふくれていたイルーシャはカデイスに背を撫でられて機嫌を直したようで、おとなしくカデイスに抱っこされていた。

「イルーシャ、こっちにおいで。カデイスになにされるか分からないよ」

今度はキースがイルーシャをカデイスから奪う。

「やあっ」

「ふざけるな、キース。それはおまえの方だろう」

再びカデイスがイルーシャを奪い返す。

「やだあつ。かでいす、きいす、きらーいっ！ おりるーっ」

イルーシャのその言葉にくだらないう争いをしていた二人が固まる。

「ゆーにすおねえちゃんっ」

イルーシャはカデイスの腕から離れると、今度はユーニスに抱きついた。

「……お二人とも、中身が子供なのは問題ではないのですか？」

ユーニスがイルーシャの背を撫でながら、至極もつともなことを言った。そう言われれば、二人とも黙るしかない。

「キース様、イルーシャ様は元に戻れるんでしょうか？」

「なんとも言えないな。こんな事例は初めて見たし。あの薬もそうそう試せないし、しばらく様子見るしかないね」

「……自然にまかせるということか」

「そういうこと。けど、こんなに急に大人の姿に戻るとは思わなかったな。たぶんだけど、それで精神の方が体の成長に付いていけなかったんだと思う」

「なんにせよ、困りましたわね……」

三人が溜息をついていると、イルーシャも難しい顔をした。

「こまつたー」

「……いや、おまえは絶対困ってないだろう」

カデイスのそのつつこみに反論する者はもちろんいなかった。

12 イルーシャ、だっこされる2

「いるーしゃ、おにわにいくー」

朝食を食べ終わったイルーシャは椅子から立ち上がって宣言した。お気に入りの庭園に早く行きたくて仕方ないらしく、椅子の背を掴んでぴよんぴよんと飛び跳ねる。

「はい、お庭ですね。それでは参りましょうか」

リイナがイルーシャの手を引いて、部屋の外に出る。イルーシャの部屋の外では、マーティンが警護に当たっていた。

「イルーシャ様、おはようございます」

マーティン自身はイルーシャが子供化してから初めて会ったわけだが、リイナやダリルからイルーシャに関する情報を得ていた為、さして混乱はなかった。

マーティンが笑顔で挨拶すると、イルーシャは首を傾げた。

「おはよーっ。……おにいちゃん、だれ？」

「俺は、マーティンです」

「わたしの息子……子供ですわ」

「りいなおねえちゃんの？」

「……おねえちゃん？」

マーティンが不思議そうな顔をした。自分の母親をお姉ちゃんと呼べたらそれは戸惑うだろう。

「おんなのひとは、みんなおねえちゃんなのー」

「そうなのですか」

その理屈はよく分からなかったが、マーティンはとりあえず頷いた。子供の言動は理解できないことが多いものだ。

「まーていんおにいちゃん、あくしゅー」

「マーティンでいいです。おにいちゃんはいりません」

イルーシャに両手を握られて、マーティンは苦笑して握り返した。
「まーていん？」

「そうです」

イルーシャが彼の名前を繰り返すと、マーティンが頷く。

「イルーシャ様」

「おや、元に戻られたんですか、イルーシャ様」

「あ」

報告書を提出しに来たヒューイとブラッドレイに声をかけられて、イルーシャがぱたぱたと二人に駆け寄る。

「ひゅー、おはよー！」

そう言つと、イルーシャはヒューイに抱きつく。ブラッドレイがその様子を見て口笛を吹いた。

「ななな、なにをなさってるんですか、イルーシャ様っ」

柔らかい体を押しつけられて、ヒューイが真っ赤になって狼狽える。

「ひゅー、だっこして〜」

ヒューイに頬を擦りつけながらイルーシャが言う。ヒューイは耳まで真っ赤になってされるがままになっていた。

いつまでも抱っこされないので、イルーシャは顔を上げてヒューイを見る。

「……ひゅー、だっこ、だめ？ いるーしゃ、きらい？」

眉を下げて泣きそうな顔になるイルーシャにヒューイはぐらぐらする。

「いや、嫌いじゃないですっ」

むしろ、その逆です！ とヒューイは言えるものなら言いたかった。

「じゃ、だっこして？」

小首を傾げて無邪気に笑うイルーシャは理性が振り切れるくらい愛らしい。

「分かりました。抱っこします、抱っこしますよっ」

半ば自棄になりながら、ヒューイはイルーシャを抱き上げる。

「わあいつ、ひゅー、だいすきー」

イルーシャがヒューイに抱きついてはしゃいだ。

……ひゅー、だいすきー……ひゅー、だいすきー……ひゅー、だいすきー……。

イルーシャの言葉が何度もヒューイの中で繰り返される。

——俺はもういつ死んでもいい！

ヒューイが一人で感動している傍で、ブラッドレイが両手を伸ばした。

「ヒューばかりずるいですよ。イルーシャ様、俺も抱っこさせてください」

「うんっ、ぶらっどもおはよーっ」

今度はブラッドレイの腕の中に収まったイルーシャは彼の首に抱きついた。

「……これは役得ですね」

そう言いながらブラッドレイはイルーシャの背を撫でる。

「おい、イルーシャ様にやたらと触るな」

「なんだヒュー、嫉妬か？」

にやにやとブラッドレイが笑うと、ヒューイがむっとした。

「イルーシャ様、また俺に抱っこさせてください」

ヒューイがそう言うと、イルーシャは簡単に頷いた。

「うんっ」

イルーシャがヒューイに向けて両手を差し出すと、彼はその体を抱き止める。

「イルーシャ様、それはないですよ……」

ヒューイはやくブラッドレイに向かって鼻で笑うと、イルーシヤに尋ねた。

「イルーシャ様、どこか行きたいところがありますか」

「いるーしゃねえ、おにわみたーい」

「そうですか、じゃあ、庭に行きましょう」

ヒューイの中では既に報告書を提出しに来たことはどこかに追いやられていた。

「うんっ、ひゅー、ありがとー」

「待て、俺も行くぞ」

イルーシャを抱いて歩きだすヒューイの後をブラッドレイが続いた。

「……」

その一部始終を見ていたマーティンが啞然とした顔でたたずんでいた。

「……紅薔薇も白百合もあんなんで大丈夫なんですか」

「あのお二人はとても有能ですよ。その有能な方をメロメロにしまつのがイルーシャ様なのです。さすがですわね」

「はあ……そうなのですか」

そう返しながらも、イルーシャを抱っこできるあの二人が少しうらやましいと感じるマーティンなのであった。

13 イルーシャ、いけないことをする

「おはなー、おはなー」

ヒューイに連れられて庭園まで来たイルーシャは謎の歌を歌っている。

丸くかたどられた植え込みの周りをイルーシャがぐるぐるとスキップしているのをヒューイとブラッドレイはただ傍観していた。

「……なあ、イルーシャ様、体は元に戻られたが、中身は三歳のままなんじゃないか？」

冷静になったヒューイがブラッドレイに聞くと、彼の親友は肩をすくめた。

「おまえ、どれだけ気が動転してたんだ。俺はすぐに気が付いたぞ」
そう言われると、ヒューイは黙るしかない。

「……しかし、この状態は結構深刻なんじゃないか？ 三歳であられたときはまだともかく、体が大人だといろいろと問題が……」

「そのおかげで、おまえはイルーシャ様を堪能できたんじゃないか」
「ブラッド！」

ヒューイは途端に真っ赤になって、イルーシャの邪魔にならないように小さく怒鳴る。

しばらくしてマーティンとリイナが彼らの後に追いついてきた。

「まあまあ、微笑ましいですわね」

いい歳をした大人が謎の行動をしているのを見てそう言えるリイナはやはり肝が座っている。

イルーシャはスキップするのに飽きたのか、今度は幹の立派な樹に登り始めた。

「イルーシャ様！」

リイナ以外の三人が慌ててイルーシャに駆け寄って止めた。

「イルーシャ様、姫君は樹に登っては駄目です」

マーティンがそう言うと、樹にしがみついたままのイルーシャは

不思議そうな顔になる。

「きいすは、いるーしゃ、かぶとむしになったらかわいいていつたよ？」

「……はい？」

意味不明なイルーシャの言葉に三人が首を傾げると、リイナが解説した。

「以前、イルーシャ様が樹に登ってカブトムシの真似をされたのです。キース様には大好評でしたわ」

それは三歳のイルーシャがやれば、確かに可愛らしいだろう。

「しかし、大人の姫君が樹に登ってはまずいです」

ヒューイが言い含めると、イルーシャは瞳を見開いた。

「おとなはのぼらないの？」

「登りません」

「おひめさま、ぜんてんもかぶとむしもだめ？」

「……前転？ イルーシャ様がされたんですか？」

ブラッドレイがイルーシャのお転婆な姿を想像して少し笑った。

「かでいすときいす、ぜんてん、みえるからだめなんだって」

しょぼんとしてイルーシャが樹から離れた。

「なにが見えるんです？」

「おそらく、下着のことかと」

こともなげにリイナが言った。

それは、カデイスとキースも焦ったことだろう。

三人は二人のその時の心境を思っ、同情した。

「したぎー、ぱんつのことー？」

イルーシャが首を傾げて、なんの前触れもなくドレスの裾を思い切り持ち上げたので、男性三名はぎょつとした。

まぶしいばかりに白いイルーシャの脚に釘付けになるのは悲しい男の性と言えよう。

そして、ドレスの隙間からちらりと覗いた白い布地それは――。
「イルーシャ様、それはさすがにはしたないですわ」

リイナがイルーシャのドレスの裾を下げさせる。

「あう、りいなおねえちゃん、ごめんね」

諫められたことで、イルーシャはいけないうことをしたと理解して謝る。

「お姫様はお兄ちゃんに簡単に下着を見せてはいけませんわ」

「うんっ、いるーしゃ、わかったー」

イルーシャは納得したように大きく頷いた。

「いやはや、眼福ですな」

ブラッドレイがにやける顔を隠しもせずに言う。

「ぶ、無礼だぞ、ブラッド」

「そ、そうです。そんな目で、イルーシャ様を見るなど……」

「……二人とも、鼻を押さえて言う台詞じゃないぞ」

「ひゅー、まーていん、どしたのー？」

ことの元凶であるイルーシャが不思議そうに尋ねる。

「な、なんでもありません」

「そ、そうです。なんでもないですから」

慌てて言い繕うヒューイとマーティンは見ていて哀れなほどだった。

「……ふふふふふ」

少し離れた場所でその様子を見ていた者、約二名。キースとカデイスだ。

「まったく許しがたい。イルーシャの……を見るとは」

「そうだね、あの三人にはどうやってお仕置きしようか」

「……しかし、近くで目に出来なかったのが惜しいな」

カデイスがぼやくと、キースが黒い笑いを浮かべた。

「……カデイス、君もお仕置きの対象に加えてもいいかい？」

それはかなわないと、カデイスは慌てて首を振るのであった。それからあの三人がどうなったかは神のみぞ知る。

14 イルーシャ、カデイスといっしょ

「とんとん、はいつてますかー？」

イルーシャがカデイスの執務室の扉を叩く。それを近くで見ている近衛騎士がなにか違うと苦笑する。

イルーシャはすぐに入室を許可されるとカデイスに抱擁される。

「イルーシャ、よく来たな」

「うんっ」

イルーシャもカデイスの背に腕を回して抱きしめ返す。

端から見れば仲睦まじい恋人同士のようなだが、残念なことに片方の中身は三歳だ。

「……陛下、わたしがいることを忘れていますね」

抱き合う二人の傍にいたイザトが苦笑いする。

「……だあれ？」

見慣れない人がいるので、イルーシャが首を傾げる。

「そう言えば、そうなられてからお会いするのは初めてでしたね。

わたしはイザトと申します、イルーシャ様」

「いざとおにいちゃん？」

「どうぞイザトとお呼びください」

「うん、いざと」

こくりとイルーシャが頷くと、カデイスの視線を感じ取ったイザトが苦笑した。

「……はい、邪魔者は退散しますよ。ついでに侍女にお茶の用意をするように伝えて参ります」

「ああ」

イザトが執務室から去るのを確認して、カデイスはイルーシャの肩を抱いて応接セットまで連れていく。

長椅子に並んで腰をかけると、カデイスは滑らかな手触りのイルーシャの髪を撫でる。イルーシャはカデイスにされるがままにこ

にこしていた。

「失礼いたします」

しばらくすると、侍女がお茶を用意してきた。

「わあい、いちごのケーキーっ」

生クリームで飾られた苺のケーキを目にしたイルーシャがはしゃいだ。

「おまえはこれが好きなのか？　なら、俺の分もやるぞ」

カデイスが自分のケーキ皿をイルーシャの前に置く。

「だめーっ、これはかでいすのぶんなのーっ」

ぶんぶんと首を横に振って、イルーシャがその皿をカデイスへと押し戻す。

「おまえは優しいな」

とろけそうな笑顔でカデイスに頬を撫でられると、イルーシャは嬉しそうに笑った。

「えへへ、かでいす、いつしよにたべよ？」

「ああ」

カデイスも甘いものは嫌いではない。彼はイルーシャと並んでケーキをつついた。

「いちごー」

イルーシャは真っ先に苺をフォークに刺す。

「おいしーっ」

にこにこして苺を食べるイルーシャを見て、カデイスも幸福な気分になる。

「そうか」

「かでいす、けーき、おいしーね」

「ああ、そうだな」

小気味よくケーキをぱくつくイルーシャにカデイスは小さく笑った。

「ごちそーさまでしたー」

可愛らしく両手を合わせてイルーシャが言う。

「ああ、ちよつと待て」

「あう」

イルーシャの口の端に生クリームが付いているのをカデイスが人差し指で拭ってやる。

「なまくりーむー」

イルーシャはその生クリームをカデイスの指ごと口に含んだ。ちゅっ、とやけに生々しい音がする。

——今のはなんだ。もしかして、誘われているのか？

いや、そんなわけはないとカデイスが首を振る。

「……」

「えへ、おいしかったあー」

中身三歳のイルーシャでは、心の内で葛藤するカデイスにも気づくはずもない。

「かです？ どしたの？」

上目遣いに見てくるイルーシャはとても愛らしい。悶々としていたカデイスはなにかが焼き切れた気がした。

「……イルーシャ、まだクリームが口に付いているぞ」

「ふえ？」

カデイスはイルーシャの唇を貪るようにして吸うと、その体を抱きしめた。

「うにゃ、かです、ちゅー？」

てつきり嫌がられると思ったが、カデイスの予想に反してイルーシャは嬉しそうに抱きついてくる。

「イルーシャ……」

イルーシャの顔がカデイスに近づいて、その唇を軽く吸い上げた。「……っ」

——こうなると、もう抑えは効かなかった。

カデイスは長椅子にイルーシャを押し倒すと、誘うように半開きになった薄紅色の唇に口づけた。

「……陛下、なにをなさっているのですか」

その時、冷たい声が聞こえてきて、カデイスは一気に現実引き戻された。

カデイスが慌てて体を起こすと、そこには冷やかな目のイザトが立っていた。

「イルーシャ様は今三歳であられるのですよ。……どうぞ自重なさってください」

「あ、ああ……」

確かに体は大人でも中身は幼女なのだ。自分でもどうかしているとは思えない。

「いざと、あのね、あのね。かですといちこのけーき、たべたのー」

無邪気にイザトに報告するイルーシャに、カデイスは拍子抜けする。

誘われたと思ったのはカデイスの勘違いだったのか。

「そうなのですか。よかったですね」

鉄面皮と陰で呼ばれている男が珍しい笑顔を見せる。

「うんっ、おいしかったあー」

イルーシャがにこにこイザトに笑いかけた。

「イルーシャ、他の男に笑いかけるな」

「うっ？」

カデイスはイルーシャの肩を抱いてイザトを牽制する。それに対してイザトが痛烈な笑いを漏らした。

「おやおや、陛下は随分と狭い心をお持ちのようですね」

「……なんだと？ まさかおまえもそうなのか？」

まさかこいつも恋敵なのかと、カデイスはイザトの顔を見返す。

「……あながちその予想は間違ってもいせんかね。イルーシャ様、あいにく陛下は仕事が残っていますので、これ以上のお相手は無理です。わたしが部屋までお送りしますよ」

イザトは普段からは想像も付かないような優しげな表情でイルー

シャに手を差し出す。

「かです、おしごとー？」

「はい」

イルーシャは一瞬がっかりしたようだが、長椅子から立ち上がったイザトの手を掴んだ。

「イルーシャ、ま……っ」

「かです、おしごと、がんばってねーっ」

イルーシャに無邪気に手を振られてカデイスは黙り込む。

「それでは参りましょうか」

「うんっ」

二人が連れ立って執務室を去るのをカデイスは虚しい気分で見ていたが、やがて気を取り直して執務へと戻る。

——あのイルーシャが自分から口づけた。

その事実だけで、カデイスは気分が高揚する。いくら恋敵がいたとしても、気にならない気がした。

「なに、イザトの一人や二人くらい、増えても大丈夫だ」

カデイスは知らない。

原田家では、由希が幼い頃『ちゅー』が挨拶がわりだったということ。

15 イルーシャ、キースといっしょ

「お姫様、ご機嫌いかが？」

「きいす！」

キースがイルーシャ部屋を訪れると、イルーシャは顔を輝かせ、彼の腕に飛び込む。

「きいす、きいす。いるーしゃねえ、さくらみたい」

キースの背中に腕を回して、甘えるように顔を擦りつける。

キースもイルーシャの体を愛しそうに抱きしめ返す。

「いいよ。サクラ見に行こうか」

「わあいつ！ きいす、だいすきっ」

「嬉しいよ、イルーシャ」

キースがにつこり笑うと、イルーシャもえへへと笑い返す。

「じゃあ、行こうか」

「うんっ！」

キースはイルーシャにしがみつかれたまま、エーメ並木道へと移動した。

「さくらさくら」

イルーシャが歌いながら舞い落ちる花びらを掴もうとする。

イルーシャの歌っているのはニッポンの歌らしいが、あいにく彼女が覚えているのはこの部分だけらしい。

「ああ……」

また花びらを掴み損ねて、イルーシャがしょぼりする。

その様子が本当にがっかりという感じだったので、よけいなお世話かなと思いつつも、キースは提案する。

「イルーシャ、よければ僕が集めようか」

「いいの？」

「うん、じゃあ行くよ」

キースは風魔法を駆使して、周囲に舞う花びらを集めていく。
「ひゃあ」

エーメの花びらは、螺旋を描きながらキースが用意したガラス瓶の中に収まっていく。

「きいす、すごーいつ」

きらきらと瞳を輝かせてイルーシャがキースを見る。

「後は花を少し貰うかな」

キースは状態の良さそうな花を選んで、少量だけ摘んだ。

「さてと、加工したいから僕の部屋によるけど、ちよつといいかな？」

「うんっ、いいよー。きいす、ありがとー」

イルーシャは嬉しそうにぴと、とキースにくつついた。

イルーシャに抱きつかれるのは嬉しかったが、こつも頻繁にだど他の男にもそうしている可能性が高い。身も心も三歳だった頃とはともなく、今は大人の体なのだ。

一度、イルーシャに注意した方がいいのかもしれないな、とキースは思いつつ、自分の部屋へと移動した。

「イルーシャ、ちよつと待ってて」

「うんっ」

キースは師団付きの侍女に子供用のお茶の準備をするように指示すると、採取したエーメの花びらを半永久的に保存する魔法薬に浸す。それから風魔法で水分を飛ばすと、また瓶に詰め直した。

それから摘んできた桜の花を小さめの水晶の中に閉じこめる。それを華奢な金の台座に据えると、イルーシャの前に置いた。

「イルーシャ出来たよ。どうかな？」

「わあ、きれーいつ！　ありがと、きいす」

顔を上気させてイルーシャが喜ぶ。どうやら気に入ってもらえたようなので、キースも微笑んだ。

「ねーねー、きいすもろーるけーき、たべよー？」

キースが作業している間に運ばれて来ていたケーキにも手を着け

ずにイルーシャは待っていたようだ。本当に優しい娘だな、とキースは微笑んだ。

「ああ、そうだね。食べようか」

「うんっ、きのうはねえ、かでいすのところで、いちごのけーきたべたの。これもおいしーね！」

「そうなんだ、カデイスのところで」

特になにもなかっただろうとは思うがちょっと悔しい。

「いるーしゃ、なまくりーむすき」

にこにこしながらロールケーキを食べるイルーシャは本当に愛らしい。

「イルーシャは本当に可愛いね」

キースがイルーシャの口の端についたクリームをナプキンで拭つてやる。

「えへへ、ありがとー。それでね、かでいす、いるーしゃにちゅーしてくれてね」

「……なんだって？」

ぴしりとキースの周りの空気が凍る。

「おかえしにいろーしゃがちゅーしたら、かでいす、ねんねしてちゅーしてきたー」

……それはイルーシャを押し倒したということか。これは後でカデイスに制裁を加えなければ、とキースは決意する。

「そうなんだ、できれば僕にも『ちゅー』してくれると嬉しいな」

「うんっ、きいすにもちゅー」

なんのためらいもなくイルーシャは頷くと、キースの唇をちゅつと吸い上げる。

——ああ、これは押し倒したくなるかも。

少しかデイスの気持ちがかかった気がして、キースは溜息をついた。

だがしかし、今のイルーシャの中身は三歳なのだ。

「イルーシャ、ありがとぅ。……でももう『ちゅー』は簡単にしち

や駄目だよ。君はお姫様なんだから」

キースの言葉に、イルーシャが驚いたように目を見開く。

「おひめさま、ちゅーだめ？」

「うん」

「……わかったー。いるーしゃ、ちゅーは、ぱぱとままだけにする」
「うん、そうして」

実際はイルーシャはもう父親と母親には会えないわけだが、痛む胸を押さえながらキースは頷いた。

「ねーねー。きいす、けーきたべよー」

イルーシャが殆ど手につけられていないキースのケーキを気にして声をかける。

「うん、食べるよ」

「きいす、おいしい？」

「うん、おいしいよ」

二人は笑いあいながらロールケーキを食べた。

そんな風にして穏やかにイルーシャとキースのお茶会は過ぎていくのだった。

16 イルーシャ、うさちゃんといっしょ

「いるーしゃ、ねむい……」

昼食を取った直後、イルーシャは部屋に控えていたシェリーに訴えた。

「イルーシャちゃん、おねむですね。それでは寝室に行きましょうね」

「うん」

イルーシャは頷くと、シェリーに手を取られて寝室へと向かった。

「あれ、イルーシャは？」

キースがイルーシャの部屋を訪ねてきたが、肝心の彼女が見あたらないことに首を傾げた。

「イルーシャ様ならお昼寝中ですわ」

「そうなんだ。小さい子にはよくあることだけど、イルーシャ疲れでもしたのかな？」

「今朝庭園で駆け回っておられました」

「……そうなんだ。あいかわらずお転婆だね」

キースはイルーシャが庭園をはいで駆け回っている姿を想像して笑った。

「今日はイルーシャに贈り物を持ってきたんだ」

キースは移動魔法で空中からリボンのかかった大きな箱を取り出した。

「まあ、なんでしょう」

内心わくわくしてシェリーがそう言ったその時、寝室からイルーシャの呼び出しがあった。

「……お目覚めになられたようですね。キース様少々お待ちください」

シェリーがイルーシャの寝室に入っていくと、狼狽えたシェリー

の声が聞こえてきた。

「シェリー？ どうしたの？」

女性の寝室に入るわけにもいかないので、キースは扉の前でそう聞く。

「た、大変ですわ。イルーシャ様、また三歳のお姿になられていますの」

「なんだって」

「と、とにかく、お支度を済ませてからそちらにお連れしますので少々お待ちくださいませ」

「……わかった」

とりあえず、この事態をカデイスに知らせた方がいいのかもしれないとキースは考えると、カデイスの執務室まで移動した。

「イルーシャが三歳に戻っただと？ どういうことだ」

カデイスはキースの報告に思わず椅子から立ち上がった。

「分からない。とりあえずイルーシャの支度が済んでから確認するしかないね。また、報告に来るよ」

「待て、それにはおよばん。俺も行く」

カデイスはすぐにも移動してしまいそんなキースを引き留めると、彼と一緒にイルーシャの部屋まで飛んだ。

「あー、きいす、かでいす」

二人を見て小さなイルーシャがててつと駆け寄る。

身も心も少し前の三歳に戻ったのは本当のようだ。

「本当に戻ったんだね」

「……あの状態は楽しかったんだが……」

カデイスがしみじみと小さなイルーシャを見つめて溜息をつく。

「う？」

「——カデイス、中身が三歳のイルーシャでなにをしようとしてたんだい。一昨日、イルーシャと母のケーキを食べたんだってね。そ

の他にもいろいろと聞いたけど」

後ろ暗いところのあるカデイスは、ぎくりと体を震わせた。

「い、いや、別に……」

「あー、おつきいはこおー。なあに、なあに？」

イルーシャが目を輝かせて、キースが出した箱を見る。

「ああ、イルーシャ、君に贈り物だよ。気に入るかどうかわからないけど」

「ほんとー？ きいす、ありがとー」

嬉しそうにイルーシャがキースにぴとつとくつつく。

「開けてごらん」

「うんっ」

わくわくした様子でイルーシャが箱のリボンを解く。箱の蓋を開けるときはキースも手伝った。

「あーっ、うさちゃんっ！」

それは薄い桃色をしたウサギのぬいぐるみだったが、目が点で表現されており、口がなぜか×になっていた。

「あら、かわいいですわ！」

実物と比べてかなり変形させたウサギを見て、シェリーが素直な感想を漏らす。

「キース様、これは以前イルーシャ様が描いておられたウサギですわね！」

イルーシャ急変の報を聞きつけて突如イルーシャに付いたユーニスも目を輝かせる。

「そう、以前イルーシャがらくがきしてたのを模写して作らせたんだ。イルーシャは絵もうまいよね」

「うさちゃんーっ」

満面の笑みを浮かべて、イルーシャは胴体に長い手足の付いたウサギのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる。

「きいす、ありがとー！ だいすきーっ！」

ぬいぐるみを抱いてイルーシャはキースの周りをぴよんぴよん飛

び跳ねる。

「お、おい、イルーシャ……」

大好きなどと言われたことのないカデイスはイルーシャの喜びように肩を落とす。

それを見たイルーシャはなにを思ったか、カデイスにぬいぐるみを押しつけた。

「かでいす、うさちゃんといっしょなら、さびしくないよ?」

「あ、ああ……」

……どうやら、小さなイルーシャに慰められたようである。カデイスはイルーシャの気遣いが嬉しいやら、いい歳をしてぬいぐるみを持っているのが気恥ずかしいやらで黙り込んだ。

カデイスにぬいぐるみを渡したことで、イルーシャの関心は別のことに移ったらしい。今度はぬいぐるみが入っていた箱に自ら収まってしまうた。

「いるーしゃ、うさちゃんといっしょーっ」

「まあっ、イルーシャちゃん、可愛いですわーっ!」

きゃいきゃいと年若い侍女二人が騒ぎ立てる。

「子供は結構狭いところが好きだからね」

キースもその可愛らしい様子に噴き出した。

「これで陛下が今お持ちのぬいぐるみがあれば、イルーシャ様の魅力が充分に引き出されるのですが」

遅れて来ていたリイナがそう言ったことで、カデイスははっと気づく。

「うさちゃんっ」

カデイスにウサギのぬいぐるみを渡されてにこにこするイルーシヤは確かにこれ以上ないほどに愛らしい。

大人から子供の姿に戻ってしまったことで、がっかりしていたカデイスだったが、これはこれでありだなと思うのであった。

17 イルーシャ、お友達といっしょ

「イルーシャ様、ご機嫌いかがですか？」

「あー、だりるおじちゃん」

イルーシャは訪ねてきたダリルを見てぱあつと顔を輝かせた。

ダリルは近寄ってきたイルーシャを抱き上げると、何度も高い高いをする。

イルーシャは背の高いダリルに高い高いをされるのが好きだ。イルーシャは両手を広げながらきやつきやと喜んだ。

「今日はイルーシャ様に娘を紹介したいと思ひまして」

「うっ？」

ダリルに抱っこされたまま、イルーシャは彼が向いた方を見た。

そこにはマーティンに手をつながれたイルーシャより大きい女の子が立っていた。焦げ茶の巻き毛に黒い瞳の可愛らしい子供だった。

「リリカ、七さいです。イルーシャさま、よろしくおねがいます」

「うん、リリカ」

イルーシャに淑女の礼をして、リリカは年齢より大人びた挨拶をした。

イルーシャはダリルに降ろしてもらうと、リリカに駆け寄った。

大人ばかりの中で歳の近い少女にイルーシャは興味津々だった。

「リリカ、おいしーおかしあるの。いっしょにたべよ？」

「はい」

幾分緊張した面持ちで頷くリリカの手をイルーシャが引く。

「ゆーにすおねえちゃん、いるーしゃ、おかしたべるー」

「はい、すぐご用意いたしますよー」

応接セットに二人して向かい合って座る。少し離れたテーブルで、ダリルとマーティンがその様子を見守っていた。

すぐに果汁と焼き菓子が目の前に置かれて、イルーシャはにこにこする。

「りりか、たべて、たべてー」

イルーシャに勧められて、リリカは焼き菓子を一口サイズに分けると口に入れた。優しい甘さと絶妙な触感が見事で、大人でも絶賛する焼き菓子だ。リリカは思わずにつこりした。

「あー、りりか、わらったー。りりか、かわいー」

イルーシャが手を叩いて喜ぶと、リリカが真っ赤になった。

「わ、わたしはかわいくなんでないです。かわいいのはイルーシャさまですっ」

「んーん、りりか、かわいーよ。わらってー」

イルーシャがにこにこすると、リリカも恥ずかしそうに笑った。

「……なんというか、見合いのようだな」

「そうですね。リリカも普段イルーシャ様イルーシャ様とうるさいのに借りてきた猫みたいですよ」

ダリルとマーティンが忍び笑いをする。その会話が聞こえてきたのか、リリカが立ち上がった。

「父さま、兄さま、イルーシャさまのまえでよけいなこといわないで！」

真っ赤になって怒鳴るリリカにイルーシャはぽかんとする。

次の瞬間、リリカは我に返って、イルーシャにわびた。

「す、すみません。ごぜんでぶれいでしたね」

「ごぜんでぶれい？」

「えと、イルーシャさまにしつれいということですよ」

首を傾げるイルーシャにリリカが言い直したが、イルーシャにはまだ礼というものが理解できないようだ。

何度も首を傾げた後、イルーシャはにつこりする。

「んと、いるーしゃ、わかんないけど、りりかはおともだちだよー」

「お友だち……」

リリカは呆然とした後、うるうる瞳を潤ませた。

「あう？ りりか、なかないで？」

ぽろぽろと涙を流すリリカにイルーシャは慌てて駆け寄った。ド

レスのポケットからハンカチを取り出すと、リリカの涙を拭う。

「イ、イルーシャさま」

「りりか、はんかちつかって？」

心配そうに見てくるイルーシャに、小さくなってもイルーシャはイルーシャなのだとしりり力は理解した。

母であるリイナからさんざんイルーシャがどんなに素晴らしいか聞かされて、りり力は遠くからその綺麗な姿を見て憧れていた。

そのイルーシャが自分を友達だと言ってくれる。それだけでりり力は感激だった。

けれど、イルーシャが素晴らしいのは姿だけではない。

「さすがイルーシャさまですね」

「う？ りりか、りいなおねえちゃんそっくり」

目をぱちぱちさせて言うイルーシャに、りり力はにっこり笑った。

「おやこですから」

「おやこー。うん、そっくりーっ」

イルーシャが納得したようにうんうんと頷く。

「りりか、おかしたべたら、おにわいこ？ いるーしゃ、おはなすきな」

「はい、ぜひごいつしよさせてください！」

その誘いをイルーシャ信者のりり力が断るはずはなく、りり力は満面の笑顔でそう言った。

その後。小さな二人が庭園を仲良く手をつないで歩いていく後に、ダリルとマーティンが付いて微笑ましそうに笑う姿が見られたという。

（イルーシャは『おともだち』を手に入れた！）

18 イルーシャ、かくれんぼする

イルーシャの最近のお気に入り遊びは、かくれんぼだ。

寝台の下に隠れたり、置物を置くちょっとした隙間などに隠れたりする。

なにせちまつこいので侍女達が探すのが大変なのだが、そういうときには魔力を辿れるキースが大活躍していた。

「きいす、つまんない」

せつかく隠れたのにすぐに見つかってしまつて、イルーシャは私室でむくれながら果汁を飲んでいた。

つまんないと言われたキースは苦笑しながら小さなイルーシャを諭す。

「駄目だよイルーシャ。君がかくれんぼが好きなのは分かったけど、シェリーやユーニスが困るだろう？」

なにせこれだけ可愛いのだ。

私室ならばまだいいが、城内や庭園などで万が一隠れているイルーシャをどこぞの変態貴族が見つけて誘拐なんて羽目になったら目も当てられない。

「きいす、だめだめばかり。きらい」

基本的に物わかりのいいイルーシャだが、遊びをかなり制限されているので機嫌が悪い。

「困ったね……」

キースがどうやってイルーシャの機嫌を直そうかと思案していると、カデイスが取り次ぎもせずに部屋の扉を開けた。

「イルーシャ」

「カデイス、君は何度言ったら分かるんだい。女性の部屋に入るときは最低限でも扉を叩かないと」

「かでいすっ」

説教するキースの脇を抜けて、イルーシャがカデイスの脚にすが

りつく。その体をカデイスが抱き上げた。

「あのね、あのね。きいすがひどいの。いるーしゃ、かくれんぼしたいのに、きいす、しちゃだめっていうの」

ぴとつとカデイスに抱きつきながら小さなイルーシャは注進する。それを見ていた全員があーあという顔になった。

「そうか、それはひどいな」

カデイスに甘えるように頬ずりするイルーシャの背中を撫でながら、カデイスが緩んだ顔で頷いた。

こうなると、先の展開はもう決まっていた。

「キース、イルーシャの楽しみを奪うな。子供の遊びくらい許容してやれ」

王の一声で、イルーシャのかくれんぼは容認されたのだった。

「……もういいよー」

かくして、庭園でのかくれんぼ大会は始まった。

「いるーしゃねえ、みんなとかくれんぼしたーい」

イルーシャのこの言葉で、参加者はカデイス、キース、ブラッドレイ、ヒューイ、マーティン、シェリー、ユースという大人数だ。「イルーシャちゃん、どちらにいらっしゃいますかー？」

庭園にシェリーとユースの声が響くがもちろんそれに答える声はない。

「それにしても、イルーシャ様がこんなわがまま言われるなんて珍しいですね」

マーティンが辺りを注意深く見ながら言う。

「まあ、普段かなり行動を制限されていらっしやるからな。たまには仕方ない」

ヒューイも周りを見回しながら答える。

「それにしても、こんな時に若草色のドレスを選ぶとは小さくても

賢い方だな」

ブラッドレイの言葉に、二人は頷いた。確かに庭園で若草色はかなり見つけにくい。かくれんぼの為にわざわざその色に着替えたイルーシャの賢さに、皆が感心していた。しかし、その感心も時間がたつと焦りが先立つようになってきた。

「……なかなか見つからないものだな」

すぐに見つかると思っていたカデイスも少しばかり焦れ始めていた。

「なんなら、魔力探索するけど？」

「……いや、それは駄目だ。イルーシャの機嫌を損ねてしまう」

キースの提案にカデイスが首を振る。その時、ヒューイが声を上げた。

「あ、待つてください」

周りの花と違う花が咲いているのを見つけたヒューイはその場所をかき分けた。

すると、そこにはびっくりした顔をしたイルーシャが両手に花を持って佇んでいた。

「みつかったー」

てつきりがっかりするかと思ったが、イルーシャはにこにこしてヒューイに抱きついてきた。

周りの男達はイルーシャを独占されてしまつて内心おもしろくなかったが、ヒューイがこのかくれんぼの勝者だ。文句を言うのはとりあえずやめておいた。

ヒューイはイルーシャの体を抱き上げると、にっこりと笑いかける。

「可愛いお花ですね」

「うんっ。いるーしゃも、そーおもっ」

褒められたのが嬉しかったのか、両手に持った花を示してイルーシャがにこおつと笑った。

「違いますよ。イルーシャ様がお花なんですよ」

「いるーしゃ、おはな？ おはな？」

彼のその言葉に目を輝かせてイルーシャがヒューイを見る。

「はい、とても可愛いお花ですよ」

ヒューイが綺麗に笑うと、イルーシャは頬を染めて照れ笑いだした。

「えへへー、いるーしゃ、おはなになっちゃったー」

それからというもの、願いを叶えられて満足したのか、イルーシャのわがままは一応なりを潜めたという。

19 イルーシャ、騎士達に会う

「あ、きいす、いらっしやーいっ」

イルーシャの部屋を訪ねてきたキースを見て、イルーシャは嬉しそうに彼に駆け寄った。

「ねー、ねー、きいす。ぱばとママはいついるーしやをむかえにくるの？」

突然イルーシャにそう尋ねられたキースは一瞬絶句すると、それでもすぐに気を取り直して言った。

「ごめんね、きみのパパとママはとても忙しいみたいで、それはもう少し先になりそうなんだ」

「……そーなんだ」

目に見えてしょんぼりするイルーシャにキースは良心の呵責を感じたが、こればかりは真実を話すわけにもいかなかった。

「ぱばとママ、いるーしやのことわすれてないかなあ」

「大事な君のこと、忘れるわけじゃないじゃないか」

「うん……」

キースが慰めたが、イルーシャは沈んだままだ。どうしたものかと思案したキースは、イルーシャを彼女のお気に入り場所に連れていってみることにした。

「ところでイルーシャ、サクラ見たくないかい？」

「……さくら！ うん、みたい！」

エーメの花が大好きなイルーシャは、その言葉でぱっと顔を輝かせた。

「じゃあ、行こうか」

「うん！」

キースはイルーシャを抱き上げると、エーメの並木道まで移動した。

イルーシャとキースがのんびりと花見をしていると、見知った人物から声をかけられた。

「イルーシャ様ではないですか」

「あー、ぶらつど!」

どうやら、城からの帰りらしい。今日はヒューイは一緒ではないようだ。

イルーシャはブラッドレイのところまでとてと歩いていくと、「だっこー」と要求した。

ブラッドレイがイルーシャを抱き上げると、イルーシャは嬉しそうに彼にしがみついた。

「イルーシャ、僕とサクラを見てくれるんじゃないのかい。ひどいなあ」

イルーシャの関心がブラッドに移ったのを見て、キースが苦笑しながらぼやく。

「う、ぶらつどもいつしよじゃだめ?」

「イルーシャ様、これからわたしは宿舎に戻るので一緒に花見はできませんよ」

地位の高いキースに遠慮して、ブラッドが言う。

「しゅくしゃってなあに?」

聞き慣れない言葉にイルーシャが首を傾げる。

「わたしのような騎士や兵が大勢生活している場所ですよ」

「えー、いるーしゃ、みたい!」

「いや……、イルーシャ様が来るような場所ではないですよ。男ばかりでむさくるしいですし」

「えー。おにいちちゃんいっぱい? みたーい、みたーい」

遠回しに断ったブラッドレイの言葉はよけいにイルーシャの好奇心を刺激したようだ。

「ねーねー、きいす。いるーしゃ、ぶらつどのしゅくしゃみたい」

今度はおねだりを始めたイルーシャに、キースは苦笑した。

「イルーシャがこう言ってるんだから、仕方ないね。ブラッドレイ案内を頼むよ」

「……分かりました」

ブラッドレイも苦笑して、キースに頷いた。

基本的にイルーシャに甘い二人だ。イルーシャのお願いをはねのけることは難しかった。

キースの移動魔法で一氣に紅薔薇騎士団の宿舎の前に来た三人は建物の中に入る。その途端、騎士達がブラッドレイに気安く声をかけてきた。

「おおー、なんですか団長、その可愛い娘は」

「まさか隠し子じゃないですね」

ブラッドレイは隠し子発言をした騎士を小突きながら、そんなわけないだろうと苦笑した。

「この方はイルーシャ様だ」

ブラッドがそう言うと、場が騒然となる。

「イ、イルーシャ様!？」

「た、確かに面影はありますが……」

騎士達に注目されて、イルーシャは大きな瞳をこぼれそうなくらい見開く。

「若返りの魔法薬を被ってこうなったんだ。もうしばらくすれば元に戻ると思うけど」

キースがブラッドの言葉を補うように言うと、騎士達は納得したようだ。

「……そうなんですか。それは大変なことになりましたね。でも、この姿のイルーシャ様もとても愛らしいですが」

「確かに可愛いなあ」

「えへへ、ありがとう」

騎士達の言葉に、ブラッドの腕の中のイルーシャがはにかんで笑うと、恥ずかしそうにブラッドにしがみつく。

「うおお、本当に可愛いつ！」

イルーシャのその殺人的な愛らしさに騎士達が悶絶する。

「イルーシャ様、なにか飲まれますか？ ああ、菓子も用意させましょう！」

「いるーしゃ、じゅーすがいい」

「分かりました！」

最近騎士になったばかりの者が速攻でイルーシャをもてなす準備をさせるよう部屋を飛び出していく。

「おまえら、このイルーシャ様にも同じような態度なんだな……」

ブラッドが呆れたように言うのを当のイルーシャはきょとんとして聞いていた。

20 イルーシャ、騎士達に会う2

「イルーシャ様、おいしいですか？」

「うんっ、とってもおいしいよー。ありがとー！」

にこにこして焼き菓子を頬張るイルーシャを見ながら騎士達がデレデレした顔をする。

「……おまえら、そのだらしない顔はやめろ」

さすがにブラッドレイが見かねて、イルーシャを取り囲む騎士達に注意する。

「……前から思ってたけど、随分とブラッドレイのところは気安い雰囲気なんだね。これがヒューイだったら、雷が落ちてそうだけど」

「……まあ、ヒューイは自分にも他人にも厳しいですからね。わたしもこれでも締めるところは締めているつもりなんです」

「分かってるよ」

騎士達にイルーシャを独占される形になってしまったキースは苦笑する。

「う？ ひゅー、きびしいの？」

甘いヒューイしか知らないイルーシャは不思議そうに首を傾げた。

「いや、あれは厳しいなんてものじゃありませんね。あれは、鬼ですよ、鬼！」

「……おい」

さすがに親友をそこまで言われて、騎士の一人が力説するのをブラッドはたしなめようとしたが。

「……ほう」

入り口の傍に数名の騎士を引き連れてヒューイが立っているのを見て、紅薔薇騎士団の面々が凍り付く。

「あー、ひゅー！」

ぱあっと顔を輝かせてイルーシャがたってこヒューイの傍に駆け寄る。

「ひゅー、だっこー」

腕を上げてねだるイルーシャにヒューイが花のように微笑む。

その様子に両騎士団の面々がおかしなほど狼狽えた。

「あ、あの氷の騎士がわら、わら……っ」

「はい、抱っこですね」

そんな周囲をもとめせず、ヒューイがイルーシャを抱き上げる。

「いるーしゃねえ、おにちゃんたちとおはなししていたのー」

「そうですか」

ちらりと紅薔薇騎士団の面々にヒューイが目をやると、びっくりと騎士達が怯える。

「……おまえら、少々情けないぞ」

ブラッドレイがぼやくのも仕方ないだろう。

れっきとした騎士がそこまで怯えるのは、少し、いやかなり滑稽だ。

「ねー、ねー、ひゅーっっておになのー？」

無邪気な言葉は、時に凶器だ。

周りにいる騎士達はひいいつと声にならない悲鳴を上げた。

「……イルーシャ様には、そのように見えますか？」

「うっん、ひゅーはとってもきれいだよー。おにちゃんにみえないくらいー」

ぴと、とイルーシャはヒューイにくつついて甘えるように頼ずりする。

「……そうですか」

ヒューイにとっては微妙な言葉だったが、イルーシャには最大級の褒め言葉なのだろう。

「イルーシャ、僕にも抱っこさせてほしいな」

「うん、きいすともだっこー」

キースが少しじれたように腕を差し出すと、イルーシャはそちらへ移動した。

甘い菓子の匂いをさせたイルーシャの温もりが消えてしまったこ

とで、ヒューイは少し溜息を付くと、紅薔薇騎士団を訪ねた本題に入った。

「さて、明後日の合同演習のことなのだが」

「ああ、そのことか。……せめてイルーシャ様がいらつしやる間はその話題はやめておかないか。まだ茶菓子をお出ししたばかりなんだ」

「……そうか、ではやめておこう」

そのイルーシャはキースの膝に座って果汁を飲んでいる。その間も紅薔薇と白百合の騎士達に質問したりして、とても楽しそうだ。

ブラッドレイとヒューイは騎士達とも離れた場所で二人で話し込むことにした。

「イルーシャ様は子供の姿でもあの男共に物怖じしないんだな」

「まあ、恥ずかしがり屋ではあるが、基本的に人なつこい方だからな。あの姿でもあの方の愛らしさにうちの騎士達はやられてしまつて大変だぞ」

ブラッドレイはおどけて言うが、顔を崩しながらイルーシャに対応する騎士達を見れば、それが事実なのは一目瞭然だ。

「……そうか。では、俺達も注意しなければな。できるかどうかは全く謎だが」

「なんだ、弱気だな」

からかうようなブラッドレイの言葉に、ヒューイは苦笑した。

「なにせ、団長自身が既にやられているからな」

素直に自分の気持ちを認めるヒューイにブラッドレイは少し瞳を見開くと、やがてにやりと笑った。

「……違うない」

しばらくして、話し疲れたイルーシャはキースに連れられて自分の部屋に帰っていった。

「……さて」

ヒューイが短くそう言ったことで、ようやく騎士達は天国から現実に立ち返る。

真っ先に青ざめたのは、ヒューイを鬼扱いした騎士だった。

「……確かりチャードだったか。今度の合同演習の時は覚悟しておけ」

名指しされたりチャードという騎士はひいいと頬を覆って叫んだ。

白百合騎士団団長、ヒューイの別名は氷の騎士。またはシゴキの鬼。

イルーシャにはどんなに甘かろうが、騎士達にはヒューイはやっぱり鬼なのであった。

21 イルーシャ、チョコを配る

執務も一段落したある日の午後。カデイスがイルーシャの部屋へ訪ねてきた。

「イルーシャ、なにか欲しいものはないか？」

普段その方面ではキースに水をあけられっぱなしのカデイスが小さなイルーシャに尋ねた。

「うーんと、いるーしゃ、ちょこがほしー。たーくさーん」

イルーシャが両手を大きく広げて主張すると、カデイスは思わず首を傾げた。

「たくさん？ そんなに食べるのか？」

カデイスの問いにイルーシャは首をぶんぶんと振って答えた。

「ちがうよー。だいすきなひとにくばるのー。ばれんたいんなのー」
「バレンタイン？」

どうやら人名らしいが、イルーシャも詳しくは分からないらしく、そう、とだけ言っただけで頷いた。

「……まあ、よく分からないが用意してやろう」

「恐れながら、陛下、チョコは小さなものの方がよろしいですね。イルーシャ様はお小さいのですから」

よく分からないながらも、イルーシャの願いを叶えるべく指示をしようとしたカデイスにリイナが的確なことを述べる。

「それもそうだな。リイナ、手配は頼むぞ」

「かしこまりました」

その王の命にリイナは微笑んで見本のような礼をした。

それから数日後、綺麗にラッピングされたたくさんのチョコレートがイルーシャのために用意された。

それをイルーシャは籠に入れてもらって、いろいろな人に配って回った。

もちろん後ろにはシェリーとユーニスも籠を持って付いてきた。ちなみに侍女達には既にチョコは渡し済みだ。

「ありすとおじーちゃん、いつもありがとー。だいすきー」

「ほうほう、これはうれしいですなあ」

可愛らしくチョコを差し出すイルーシャにアリストは相好を崩した。

「なぜ俺が先ではなくアリストなんだ、イルーシャ」

目の前で、先にアリストにチョコを渡されたカデイスはついついばやいた。

つまりイルーシャにチョコを用意したのは自分だと言いたいらしい。

「別にいいじゃないか、順番なんて。どうせ、みんな貰えるんだし」

「そうです。小さなことを気にされているとイルーシャ様に嫌われますよ」

キースの意見に同意したイザトが辛辣なことを言う。

「……おまえ、相変わらずきついな」

カデイスがうんざりとした顔をしたが、イルーシャが「かでいすかでいす」ととてとて近寄ってきた途端、その表情を崩した。

「かでいす、だいすきー。いつも、ちょこありがとー……あれ？」

いつもありとうとチョコありがとうと言いたかったのが混ざってしまつて、イルーシャは何度も首を傾げた。

その可愛い様子に、その場にいた皆が噴き出す。

「本当におまえは可愛いな」

「えへへ、ありがと？」

カデイスがイルーシャの頭を愛しそうに撫でると、イルーシャは頬を染めてもじもじした。

それを目にした侍女達が「イルーシャちゃん、可愛いですわー！」と叫んだ。

どうやら小さいイルーシャがもじもじと照れる姿が彼女達のツボらしい。

「イルーシャ、僕にはくれるのかな？」

イルーシャがカデイスに照れる様子を目にしたキースが、さっきの余裕もどこへやらで尋ねた。

「うんっ、きいす、いつつもありがとー。だーいすきっ」

「うん、僕もイルーシャが大好きだよ。ありがとう」

チョコを受け取ったキースが微笑んでイルーシャの頭を撫でる。

「いざと、だいすき」。いつもありがとー！」

「ありがとうございます」

鉄面皮と噂されるイザトもイルーシャにチョコを貰って嬉しそうだ。

「んーと、あとはおにいちやんたちにくばるのー」

「そう。じゃあ、師団舎に移動しようか。それにしてもチョコは足りるのかい？」

キースのもつともな問いに、シェリーが代表して答える。

「キース様、まだまだ大丈夫ですわ。まだ予備はたくさんあります」それを聞いて、いったいどれほどの数を準備したんだとカデイス以外の男性陣が顔をひきつらせる。

「それじゃ、おにいちやんたちのところへ、しゅっぱーっ！」

そのイルーシャの元気な声で我に返ったキースが、魔法でイルーシャ一同と共に師団舎へ移動した。

ちなみに、突然イルーシャにチョコを貰って大好きと言われた騎士や兵達はその日一日浮き足立っていたという。

22 イルーシャ、元に戻る

「うー……ん」

なんだか息苦しい。

不意にイルーシャは圧迫感を覚えて目を覚ました。

「……なにこれ？」

自分の体を見下ろすと、わずかにまとわりついた布地以外なにも身につけていない。

普通に眠っていて、なぜこんな格好になっているのか分からないながらも、イルーシャは呼び鈴を鳴らした。

するとまもなく寝室にユーニスがやってきた。

「……！ まあっ、イルーシャ様、元に戻られたんですね！」

かなり驚いたようにそう言うユーニスに、イルーシャは首を傾げた。

「……元に戻った？ なにそれ。」

「あのお姿はとても愛らしかったので、個人的には少々残念ですが、本当に戻られてよかったですね。皆様もきつとお喜びになられるでしょう」

うきうきしながらユーニスがそう言ったが、当のイルーシャは疑問符だらけだ。

「あの……、わたし、どうにかなってたの？」

イルーシャが疑問を口にすると、ユーニスは瞳を見開いた。

「まあっ、イルーシャ様、なにも覚えてはいらっしゃらないのですね。イルーシャ様はつい昨日までお姿と中身が三歳まで戻られていたのですわ」

「……三歳」

にわかには信じがたいユーニスの言葉に、イルーシャは呆然とする。

その間にユーニスはてきばきとイルーシャの朝の支度をしていく。

その合間のユーニスの説明で分かったことは、どうやら自分は若返りの試薬を被って三歳まで逆行してしまっていたらしいということだった。

「早速陛下やキース様にお知らせしないといけませんわね」

イルーシャの支度を整え終えたユーニスは、喜びに頬を染めながらそう言うと、カデイスにすぐに知らせるように、イルーシャの部屋を警護していた近衛騎士に伝えた。

イルーシャは居室でユーニスの淹れたお茶を飲みながらとりあえず待機していると、前触れもなくカデイスが部屋の扉を勢いよく開けた。

「ちよつと、カデイス」

いつも抗議しているにもかかわらず、一向に学習しようとしなかったカデイスに、イルーシャはこめかみをひきつらせる。

カデイスはそれを気にした様子もなく、イルーシャを引き寄せ、抱きしめた。

「イルーシャ、本当に元に戻ったのだな」

ぎゅうぎゅうと強い力で締め付けられ、イルーシャは窒息しそうになる。

「カデイス、少しは手加減しないとイルーシャが苦しそうだよ」

いつの間に来ていたのか、キースが助け船を出してくれた。

それでようやくイルーシャは息苦しさから解放されて、何度も深呼吸する。

「イルーシャ、君が元に戻ってよかった」

カデイスからようやく解放されたと思ったら、今度はキースに抱きしめられた。ただし、かなり加減はされているようだ。

「イルーシャ様、今回のことは本当に申し訳ありませんでした。元に戻られて本当によかったですわ」

キースと一緒に来たと思われるメイアが涙ながらに喜んでいる。

もしかして若返りの試薬を作ったのは彼女なのだろうか。

「え、と、なんだかよく分からないけど、心配かけちゃったみたいでごめんね?」

事態がまだよく飲み込めないながらも、イルーシャは周りの人々にかなり心配をかけたことは理解できたので、その場にいた皆に謝る。

「まあ、こうして無事元に戻ったことだし、おまえが謝ることではない。メイアとやらも、咎めはなしとする」

「あ、ありがとうございます」

メイアが涙を流しながら、カデイスの寛大な処置に感謝した。

「よかったね、メイア」

「はい」

キースも部下が処罰されなくて安心したらしく、メイアの肩を叩いて喜んだ。

イルーシャも、メイアがカデイスに罰されるところは見たくなかったものでそれは素直に嬉しかった。

——しかし、問題はまだ残っている。

「ところで、わたし小さくなっていた時の記憶がまったくないんだけど、なにかした?」

イルーシャの言葉に、カデイスとキースは顔を見合わせて黙り込む。

「……なんで二人ともそこで沈黙するの?」

「いや……、なにかしたかと聞かれれば、したかなあ、と……」

キースがイルーシャから目を逸らして、歯切れ悪く言った。それは後から考えれば、キースの気遣いだったのだろう。

だが、それを無駄にすることをカデイスはこともなげに言った。

「ああ、したな。ドレスで木登りしたり、前転したり、抱きついてみたり。一時的に姿が戻った時は抱っこしてくれとせがんだり、自分から口づけてきたりしたな」

「う、嘘っ!？」

カデイスが口にした自分のあまりの奇行に、イルーシャは思わず叫んだ。

それに、自分から口づけたってなんだ、とイルーシャは熱くなる頬を覆った。

そうしているうちに、だんだんそれまでの記憶が鮮明に思い出されてきて、イルーシャはあまりの恥ずかしさに身悶えたくなった。

「うっう、うそ、うそ、嘘!！」

真っ赤になって盛んに頭を振るイルーシャに、カデイスとキースが心配げに声をかける。

「落ち着け、イルーシャ」

「なにもそんなに恥ずかしがることはないから」

そうは言うが、十九の女にはあの奇行は恥以外のなにものでもない。

「お願いだから、忘れてえええー!！」

そう叫ぶと、イルーシャは自分の寝室に駆け込んで引きこもってしまった。

カデイスとキースは、外から「三歳のしたことなんだから、気にすることはない」「そんなに恥ずかしがるな」と扉を叩きながら説得したが、イルーシャはシーツを引き被って恥ずかしさに身悶えたままだった。

——それからしばらくして。

イルーシャはめでたく元の生活に戻ったが、三歳になっていた時のことは、しばらく禁句にするよう徹底されたという。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599p/>

絶世の美女がよういよになりました。

2011年10月5日03時27分発行